

特25

744

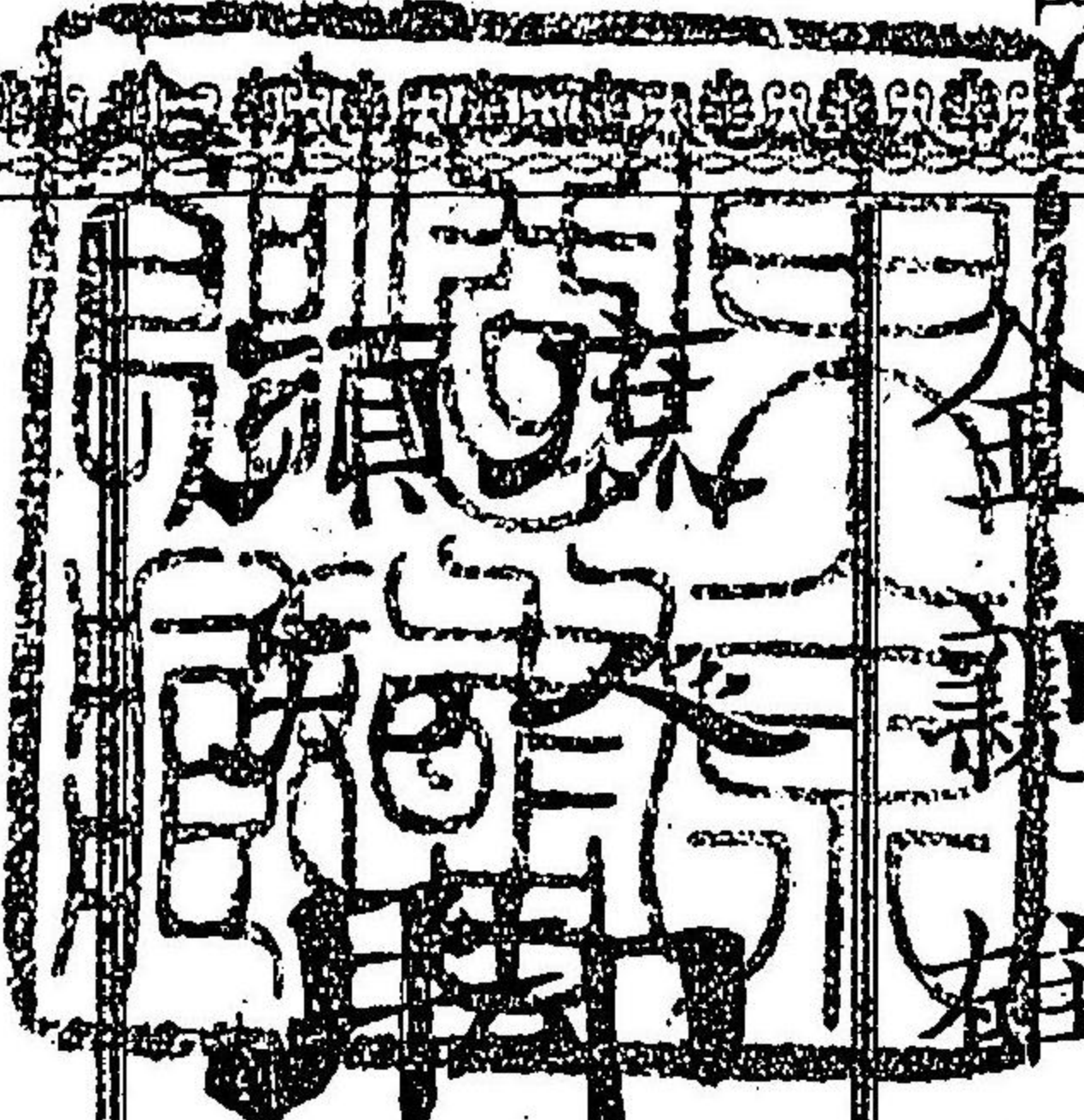
東京大學教授兼大學
醫學部脚氣病室監督

原田豊先生校閱

作

金親雄

先生纂輯



氣

一斑

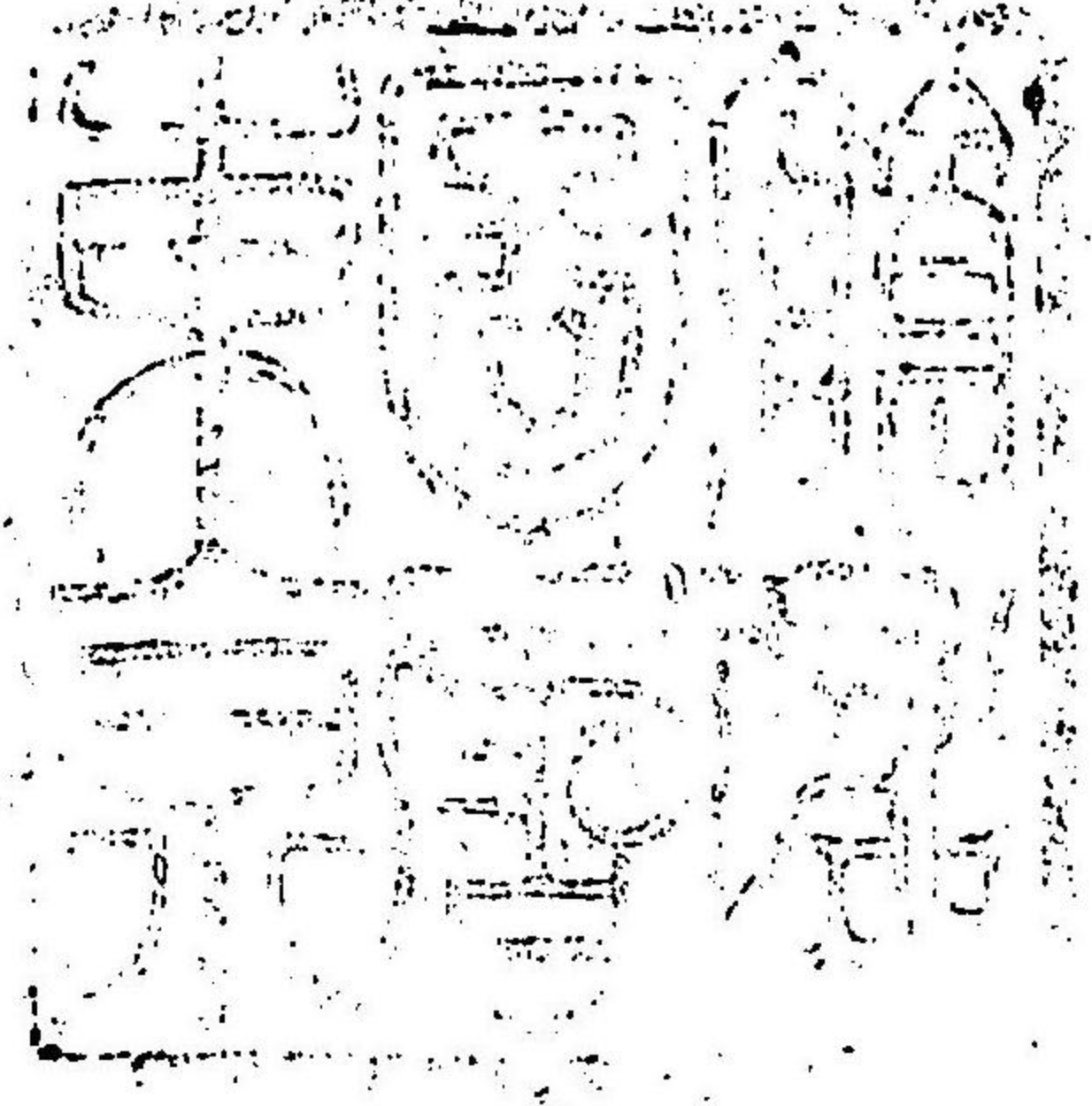
全

一名脚氣の心得

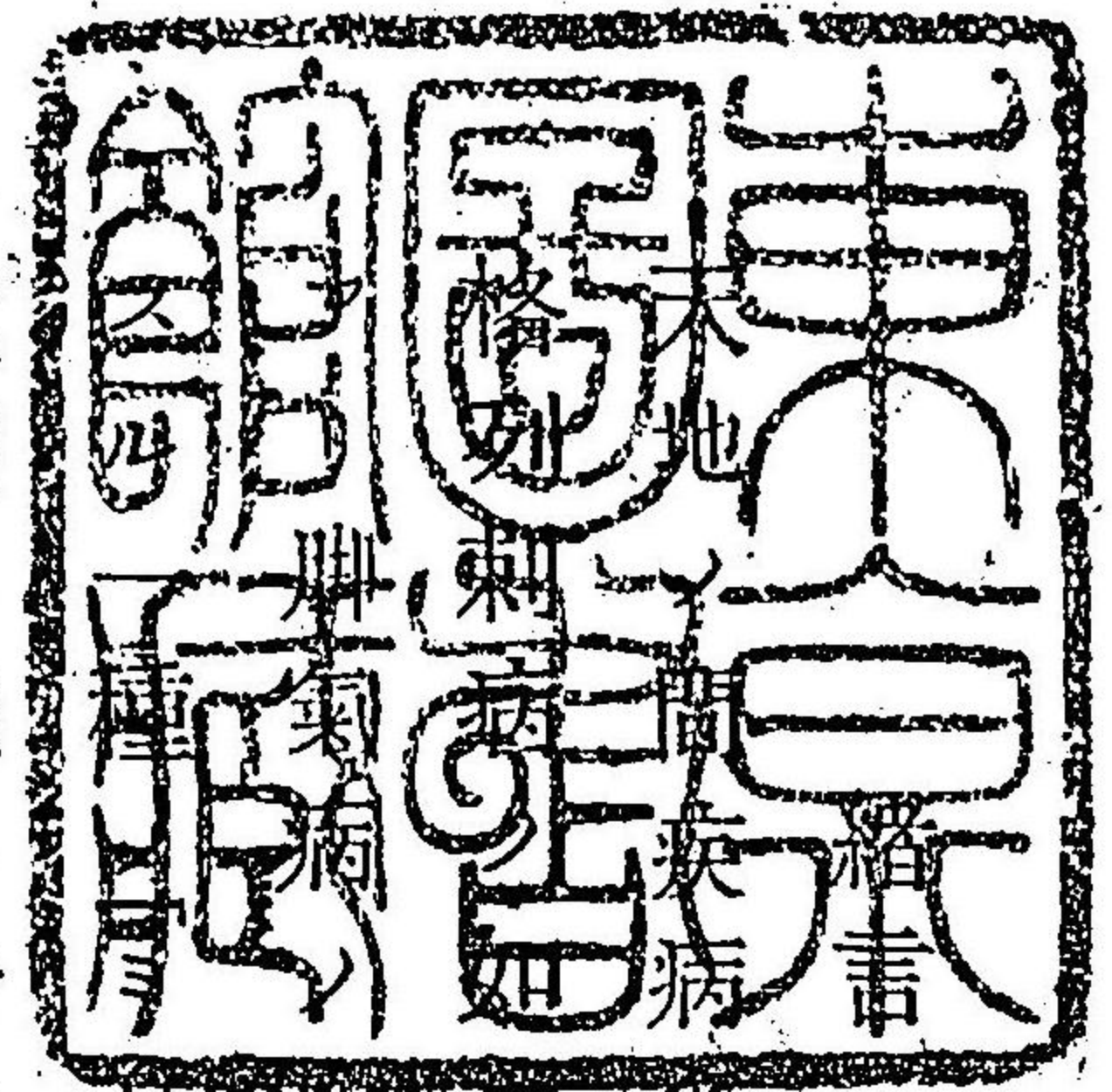
東京書肆

誠之堂藏





庶
須知人脚氣一班



多端ナリ、古ニ無クシテ今有ル者アリ
 是ナリ、古ニ微ニシテ今熾ンナル者
 如キ是ナリ、夫レ脚氣病ハ本邦ニ固有
 ヤスマ性傳染病ニシテ、毎歲夏秋ノ候
 此病ニ罹ル者其數ヲ知ラス、又之ガ爲ニ生命ヲ戕害
 スルモノ多シ、政府之ヲ憂ヒ、曩キニ脚氣病院ヲ新タ
 ニ設立シ、專ラ其原因病理ヲ審査シ其療法ヲ究明セ

ン下ヲ需メラル、故ニ世ノ刀圭ニ從事スル者ハ拮据
 黽勉シテ專ラ檢究セラル、ヲ以テ、輒近其ノ端倪ヲ
 知ルト雖、其病理療法等ニ至リテハ未タ斬新ノ説
 ナ聞カズ、一日誠之堂主人來ル談脚氣ニ及ブ主人曰
 ク、該病近年殊ニ其病勢ヲ逞フシ各地至ル處トシテ
 見ザルナク、其勢ノ慄悍ナル實ニ畏ルベシ、今日ニテ
 ハ假令刀圭者流ニ非ラザルモ、苟クモ衛生ニ志ス者
 ハ言ヲ俟タズ、攝生ニ注意スルノ徒ハ本病ノ梗概ヲ
 知ルヲ緊要ナリ、然ルニ之ヲ論スルノ書亦乏キニア
 ラザルモ、或ハ其說牽強附會ニ失シ、或ハ高尚ニシテ

素人ニ之ヲ領會シ難シ、甚タ遺憾トナス、依テ予ニ需
 ムルニ之ヲ以テス、然レモ予淺學況ンヤ本病ニ就テ
 自論アルニ非ズ、故ニ再三固辭スト雖、其ノ請フ所
 切ナリ、已ムヲ得ズ、曩キニ大學醫學部ニ在ルノ日、見
 聞ヲ集輯シタル脚氣筆記ヲ出シ、其ノ一班ヲ拔萃シ
 之ニ一二ノ新説ヲ増補シ、庶人須知脚氣一班ト名ケ
 以テ其ノ要求ニ應ズ、病理、剖檢、療法等ハ本書ノ主旨
 ニ非ラザルヲ以テ全ク之ヲ載セズ、此ノ小冊子モト
 ヨリ大方ノ覽ニ供スルニ非ズ、庶人ヲシテ須ク脚氣
 ノ一班ヲ知ラシムルノミ故ニ理會シ易キヲ專トシ

行文亦々更ニ修飾ヲ加ヘズ、覽者之ヲ恕セヨ

四

明治十八年七月

編者 識

須庶
知人
脚氣一班

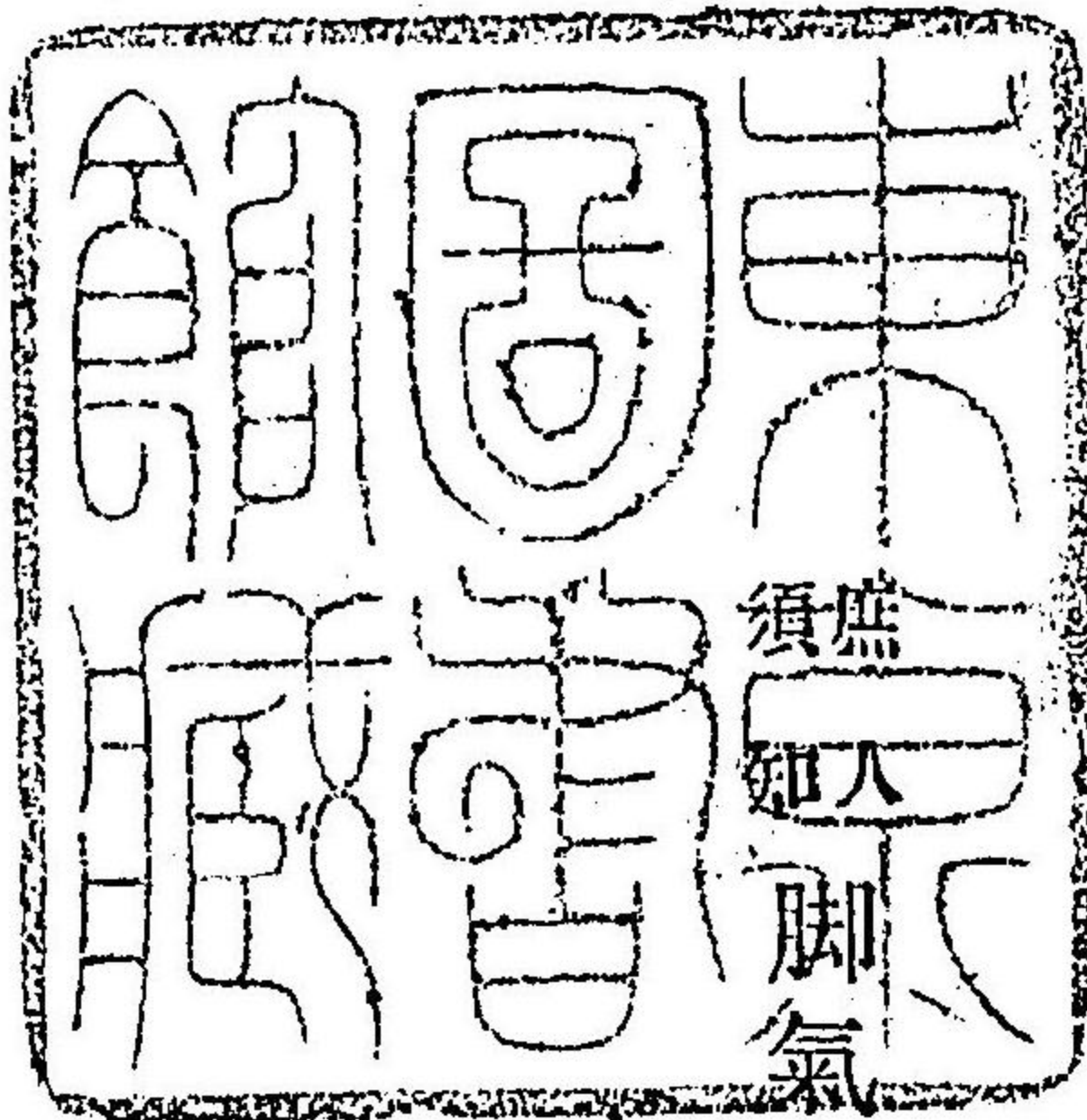
目次

第一章	脚氣の名稱
第二章	脚氣の蔓延
第三章	脚氣の原因
第四章	病毒發生ニ關する土地の狀態
第五章	氣候及ヒ時期の關係
第六章	脚氣病と年齢及ヒ雌雄の關係
第七章	脚氣病と體質及ヒ品位の關係
第八章	脚氣病と職業の關係

二

第九章	脚氣の感受性
第十章	脚氣の病徴
第十一章	脚氣の衝心症
第十二章	脚氣の預后
第十三章	脚氣の預防法
第十四章	脚氣病者の攝生法

目次終



一班 一名脚氣心得

東京大學教授兼東京大學
第一醫院脚氣病室監督

原田 豐校閱

金親 雄纂輯

○第一章 脚氣の名稱

脚氣病ハ本邦一種の風土病^{フナトビ}にして。足の疾病の意義
を有せる二個の漢字より成り。之を吾邦の音訓^{オンクン}にて
「かつけ」と唱ふるものにして。其の濫觴^{ランシャウ}を尋ねるに。何
れの世に在るや。之を詳らにせざれども。四五百年以

降現マ行ハれたるハ復タ疑ヲ容れざる處ニして往古ハ之ヲ阿ハ之ノ乃ハ介ト稱せしと云ふ。その初めハ恐らく支那地方より傳りたるものならん。支那マてハ古昔種々の名稱ありて濕痺シツヒといひ。緩風クワンフウといひ。脚弱カクジャク脚痺カクシツ脚氣カクキといひ。往時ハ流行せしが。方今ハ更らに見るとかると云ふ。然れ共本邦近時の脚氣カクキと果して同症なりしや否やマ至りてハ之ヲ明證スること能ハまじ。又印度インド「ゼーロン」「ヂヤラ」スマタラ」の如き亞細亞アジヤの南部諸島及び南亞米利加アメリカの「ブラジル」國等ニ於てハ「ペリベリ」と稱し。其の發症の能く本邦の脚氣カクキに髣髴ニするものありと雖とも。全く同一の病症ニハ非らざること恐らく一異種のものあるべし。又歐米諸國ニ於てハ古來絶て此病の流行せしとなしと云ふ。されハ脚氣病ハ本邦ニ固有ナル一種の風土病あることを知るべし。

○第二章 脚氣の蔓延

脚氣の流行ハ。今より四五十年前迄ハ。殆んど江戸京都及び大坂の如き人烟稠密の都會ニ局限せり。只海岸の市街ニハ炎暑の候に至れば。本病ニ罹るもの往々之れありしハ。古老の口碑ニ傳ふる所なれども甚

だ少く。假令罕^{まれ}之を見るも多^{おほく}ハ輕症^{けいせい}ハ過^{あま}ぎだ。江
戸^{江戸}マてハ諸侯^{しよこう}の武士^{ぶし}の勤役^{きんやく}に來り居る者^{もの}ハ最も多
くして。重^{おも}を負^おひ遠^{とほ}き^は輸^ゆと雨^{あめ}を冒^おと淖^ぬを踏^ふむが如
き労働者^{らうどうしや}之^のを見^みる。大坂^{おほさか}京都^{きんぎよ}マても亦^{また}之^のと全^{ぜん}し。
格別^{かくべつ}勞^{らう}せざる商賈^{しやうが}。或^{ある}ハ終日^{しゆうじつ}坐^まして動^{うご}かざる職工^{しやくこう}。若
しくハ他國^{たこく}より來りたる書生^{しよせい}等^らハ多^{おほく}。雇夫^{こひと}下賤^{げせん}の
者^{もの}ハな^ありし。然^{しか}る^にハ年^{とし}を經^へる^にハ隨^{したが}ひ漸^{しだ}々^{じだじだ}他國^{たこく}ハ波
及^{およ}び。近世^{きんせい}ハ至^{いた}りてハ累年^{らいねん}病勢^{びやうせい}募^{もつ}り止^とだ海岸^{かいがん}地方^{ちほう}の
みから^みる^に。山間^{やまかん}僻陬^{へくそ}の境^{かた}と雖^なも該病^{がいびやう}者^{もの}最^もと多^{おほく}。且^{かつ}つ
從前^{じゆぜん}ハ其^の流行^{りゆうこう}。唯^{ただ}炎暑^{えんじゆ}の候^{とき}に限^{かぎ}れる者^{もの}あるに。近

年寒暑^{かんじゆ}温冷^{おんれい}を選^えべ^ぎ始終^{しじゆう}茶毒^{ちやく}を社會^{しやかい}ハ流^{なが}が^り。其^の
勢^{せい}ハ愈^い々^{じやくじやく}。益^{ますます}々^{じやくじやく}。猖獗^{しやうけつ}を逞^{たくま}くして其^の底止^{そこど}まる所^{ところ}を知
らざるハ實^{じつ}ハ恐^{おそ}る^{べき}。甚^ししき^をなり。十五年^{じふごねん}の調
査^{きやうさ}ハよりて之^のを觀^{かん}る^に。全國^{ぜんこく}ハ於^おて患者^{びやうしや}の總計^{そうけい}壹萬
七千三百^{しちせんさんひゃく}余人^{よりの}。其^の内^{うち}東京^{とうきやう}ハ五千^{ごせん}人^{にん}。陸軍^{りくじゆん}ハ八千^{はっせん}人^{にん}。其^の
外^{ほか}各府縣^{かくふけん}ハ於^おて西京^{さいきやう}。大坂^{おほさか}。神奈川^{しんながは}。兵庫^{ひんが}。新潟^{しんがへ}。宮城^{みやぎ}。高知^{たかち}。
等^ら皆^{みな}多^{おほ}き^は。七百^{しちひゃく}名^な少^{すく}き^も。百^{ひゃく}名^な以上^{いじやう}の病者^{びやうしや}あらざる
なし。この調査^{きやうさ}ハ大日本^{だいじっぽん}私立衛生會^{りつりつせいせいゑい}内國衛生上^{ないこくせいせいじやう}の報
道^{ほうだう}ハ係^かる^に。尙^{なほ}ほ蔓延^{まんえん}の勢^{せい}あり。交通^{かうたう}の便^{べん}益^{ますます}々^{じやくじやく}開^{ひら}くる^に。
隨^{したが}ひ。病毒^{びやうどく}を各地^{かくち}ハ運輪^{うんりん}。古來^{こらい}曾^さて見^みざるの地^ちハ本

病を蔓延せしむるに至るや。復た疑を容れざる所なり

○第三章 脚氣の原因

脚氣の上は述べたる如く一種の風土病にして。往時
は沿海地方の風土は最も多きを以て。或は魚肉を多
く食するためは發する疾病なりと云へり。然れども
今日魚肉を産せざるの山間僻地に至る迄。脚氣の蔓
延したる事實を以て。其の説の非なるを知るべし。
又脚氣の本邦に於ける「ペリペリ」の印度に於ける。都
て植物を多食するの國に流行するを以て。米食を本

病の原因となすの論者ありしと雖も。米飯を常食と
する田舎の農夫は。魚類は饒かなる海濱の漁夫は比
すれば。本病に罹ること却て罕れなるを見れば。米飯
の脚氣と相關せざるを知るべし。又印度等は流行す
る「ペリペリ」の最も主要の原因なりと看做せられた
るもの。貧血症なれども。脚氣は却て虚弱の人より
強壯の人を侵すを多く。縦令貧血の徴を存するもの
も。此の病の難易は關するを鮮きを以て。亦た血液の
貧しきより本病を發せしむる能はざれば。何を以
て脚氣の原因と認め得べきや。宜しく下條に説く所

を以て知るを得べし。嘗て謂へる人あり脚氣の病毒ハ地中より蒸發せる所の有毒腐敗の氣より醸生せし以て人体を侵す。故に最も地は近き足脚は病徴を始めて顯はるものありと云ふ。此の説輒今學者の間は行はれたる説は稍や類したる所あり。諸家の説は曰く。本病ハ地中より一種の病毒を醸生し而して之は感染し發せるものにして。其の病毒ハ恐らく下級の有機体即ち小黴菌さいきんならんと。蓋し此の病毒を發生せるの土地ハ「マラリヤ」病を生成るが如き卑濕しめつの地にして。其の發生を幫助せるものハ濕潤と煦温なり。

故に大氣及び土地の斷へき濕潤なるハ大に病毒の發育に適するものなり。都て温暖ハ有機体を煦育するものにして。霖雨漸く收まり温度頓らに昇騰のぼるするときハ「マラリヤ」病マラリアと同しく脚氣の發病者も亦た俄らに増加し。加之既に本病に罹りたるものハ諸症著しく増進す。又本病の流行ハ「薔薇花」と共いに發らき新露と共に降ると古人の曰ひに如く。盛夏より初秋の如き地中有機物の最も分解し易き時ふあり。以上の諸點を考ふるに此の病毒ハ恐らく下級の有機体即ち「ピルツ」こまかちかひのるゐ微黴菌さいかきんよて種々の疾病の原因となる

ものなり)の一種なりと推思せられたりと雖も其の病菌を發見せるの機運に達せざりし。然るに大學醫學部講師緒方正規氏は本年一月明治十年以來衛生局東京試験所にて其の病菌の検査に着手し。或は病屍の内部器官を檢視し。或は脚氣病者の血液を採りて。試験したるの後一種の「バナルレン」の一種を見出し。能く純粹に培植せし先精密に其の性状及び發育の景況を檢視して。従前未發見せられざる一種の病菌たるを認定せられ。又此の病菌を鼠、兎、猿等の動物に接種したるにその動物の發症、及び剖檢上の變化

等脚氣病者に於けるが如し。又其の血中同一の病菌を繁殖せるを認め。其の全く脚氣の特異病毒なることを認定せられたり。之を強力の顯微鏡下に檢視せるに其の形は能く牛疫牛疫病名一ト脱痘ト云ふ或は間歇熱名病謂瘧なり所の病毒たる「バナルレン」に類せれども之より細小なり。其形は小なる槌子状にして長短ただ同ららば。人の赤血球直徑の半より二倍に至るの差ありと云ふ。赤血球は血液中の有形体にして其の形は圓盤の如く。血液一立方「ミルリメーテル」内に凡そ四百萬乃至五百萬を含む。血液の紅色は之れが

爲めにして。其の直径人の赤血球に於ては〇、〇〇七
 「ミルリメートル」なり但し「ミルリメートル」は我三
 厘二毛強に當る而して此の「バチルレン」は如何なる
 景況によりて蕃殖し又た人体中に侵入せざるや未だ
 詳細ならざると雖とも恐らくは大氣に散じて肺臓よ
 り攝取し又飲料水に混じて腸胃より吸収せられ血
 中に至りて蕃殖し以て種々の病症を發するものな
 らん故に本病は地方性傳染病と云ふべし然れども
 病者に觸接して感受するが如き傳染性の病は非也。
 上は明かなる如く地中より發生する病毒を体中よ

攝取して感傳するものなるを以て所謂「マスマ」性
 傳染病なりとす故に「ベリベリ」病とは全く原因を異
 したるが如し然れども「ベリベリ」病の原因は亦確
 定せざる所なり

○第四章 病毒發生に關する土地の狀態

脚氣病毒は土地卑濕不潔にして人煙稠密且つ汚水
 排除法の適當からざるの都府に發生し易く高燥に
 して大氣清潔人家稀疎の地は此の病毒を發生せし
 るに稀なり故に年々本病患者を出すの多きこと東京
 西京及び大坂の三都に超越せるの地なし又土地の

状態を變更し例之人民不住の市街或ハ火災後の如き數年不毛の土地を開拓して新たに家屋を築造せるときハ其の初年ハ於て住者本病ハ罹ることありといふ。凡て有機体の種芽ハ大氣ハ混して諸方ハ飛散し或ハ衣服器具等ハ粘着潜匿して運搬せられ發育ハ適應の土地ハ至れば容易ハ蕃殖せざるを以て。縱令今日よてハ更ハ本病々者を發見せざるも。上ハ述ぶる如く衛生的不完全あるの土地ハ。早晚病毒を運輸し遂ハ蕃殖して。歳々許多の人を毀傷せしむべし。豈ハ恐懼せざるべけんや。

○第五章 氣候及ハ時期の關係

氣候の感動ハ上記の如く病毒の發生ハ大なる關係を有し。一月二月三月ハ發病者甚テ稀にして。四月に至りて稍や其の數を添へ。五月六月ハ及んで始めて増加し。七八月を以て通常發病者の多き極度となす。九月より漸々減少し。金風颯々として清涼愛すべきの時期ハ至れハ。病勢大ニ衰へ既ハ病める者ハ恢復ハ傾き新たに罹る者ハ彌々減き。寒冷の期ハ至りてハ唯罕れに之を見るのみ。然れとも冬季本病の全く跡を絶たざる所以ハ。恐らく其の地人口稠密ふして

不潔卑濕なると。病菌の寒冷に遇ふも尙ほ其毒性を失はざるの性あるとに因るものならん。重症として死す就くものハ七八九の三月間多し。

本邦ハ降雨の多き地にして。殊に六月ハ炎暑の期ハ先たちて淫雨日を連ね所謂梅雨の節なり。脚氣の流行を始むるも亦た五六月にして能く本邦の雨時に偶合す。夏時炎熱の常より低く降雨の些少なる時ハ脚氣を發するものも亦た少なし。之ハ反して霖雨連綿たるの后ち頓に酷暑を轉する時ハ本病々者亦た頓に増加す。此れ地水地下水一旦昇騰して后ち低下せ

と際。地層の上際ハ遺殘する所の有機物。空氣の竄入と濕温とハ由りて腐敗し病毒を醸生するものからん。是に由りて之を觀れば雨量の多少ハ病毒の發生ハ向つて多少關係を有するが如し。

○第六章 脚氣病と年齢及び雌雄の關係

脚氣に罹り易き年齢ハ十五歳より二十五歳の間を以て最も多しとす。十四歳以下の幼年に至りてハ之に罹ること稀にして。乳齒乳齒ハ七歳前後に至りて全く脱却し永久齒永久齒之に代りて發生するものなり。未だ全く脱せざるの小兒にハ絶つて之を見だ。又二十

五歳を超ゆれば大に減少し。四十歳以上のものには甚だ少く。老年にして初めて脚氣に罹るものには最も罕なり

雌雄に就て之を論ずるときは。男子の之に罹ること適かに多く。女子の之に反して極めて稀なり。然れども女子の妊娠時若くは産褥の経過中に於て之に罹ること多し。往々平素強健の婦女も産褥に臨む毎に之を發するものあり。脚氣の産褥中に發せしもの比較や預後の不良あるもの多しとす

○第七章 脚氣病と體質及び品位の關係

體質の稟賦強健の徒は柔弱の輩に比されば却て大に本病に感受し易し。今其の本病に罹るの比準を擧ぐるときは。殆んど強壯質の病者百と虚弱質の病者一とに於けるが如し。

品位に就て論ずるときは脚氣に罹るの最も多きは中等社會の者に於て。荷夫、負丁、車力等の如き下等社會の者に甚だ少く假令之に罹ることあるも多し。輕症なり。此等には多くは強壯の體質にして常に新鮮の大氣中に勞作するを以て他の疾に感ずるも亦た從て稀れなり。又王公貴紳の如き上流社會も之に

雇ふこと稀有なり此れ其の家屋ハ宏大清潔にして且つ高燥の地位を占め平素榮養の佳良と運動の適宜あるに歸するものあらん然れとも品位を問はざ肋膜炎肺勞窒扶斯赤痢腸加答兒以上等の重症を患ひ急に身体の衰耗を招きたるものハ極めて脚氣に罹り易きものなり

○第八章 脚氣と職業の關係

職業ハ就て脚氣に最も罹り易きものハ坐業のものあり故に學生ハ最も多しとす終日坐して業を營む所の職工若くハ商估官吏之ハ次ぎ恒常職業のため

野外ハ在るものハ之ハ雇ふこと甚た少し故に農夫に見ること稀なり學生ハ劣らぬ最も多きものハ兵士あり兵士ハ自己の運動ハ不足せざるも種々の原因ありて多きものなり年齢の關係ハ勿論常習の變換群居密集其の他風土ハ馴致せざるの脚氣地方ハ移住ハ大に感受性を有する等ハ因るものあらん群居密集ハ諸の誘因中大なる感動を與ふるものとして船艦兵營塾舎工場囚獄等ハ於て發病者の多きを以て之を徴するハ足るべし

○第九章 脚氣の感受性

脚氣ハ本邦人にして新たニ居る本病流行地ニ轉ぜしものを侵すこと最も多く居住すること多年にして能く其の風土ニ馴致せるものハ之ニ侵さるゝこと少シ。蓋シ病毒の侵襲ニ慣習せると其の未だ之ニ慣習せざして大ニ感受性を具ふるニ由るものならん。脚氣の兵士、學生等ニ多き所以ハ一ハ之ニ職由ずべし。其の脚氣地方ニ轉住せしものハ移住后概ね一週年内ニ於て本病ニ感受せるもの最も多く。爾後年々を歷るニ從ひ漸次ニ感受性減少せるものなり。而して一回本病に罹るときハ多くハ年々之を發せ。其の

再感の度ハ各人同一ならざして或ハ四回より六回に至り或ハ反覆此の病に罹り已ニ三十回以上に至りたるものありといふ。初感ハ多くハ重症をれども再三感するに從ひ漸次ニ輕症となるものなり。或ハ之ニ反するものあり。然るニ吾邦ニ來住せる歐米人の感受性少シハ甚タ奇異なり。歐米人の悉く移住の人にして風土ニ慣習せざ。又本邦人と同しく同一の土地ニ棲息し同一の空氣を呼吸せるも脚氣ニ罹ると甚タ稀れにして假令之を患ふるも輕易なり。「ペリペリ」症ハ之と異にして和蘭領印度ニ在營の兵

士を侵すこと多しといふ。脚氣の歐米人は甚だ少き
 其の理未だ詳かあらざ

○第十章 脚氣の病徴

凡そ疾病の徴候たるや種々よして。自覺徴と稱し病
 者自ら感覺するの病徴あり。又他覺徴と稱し他人即
 ち醫士の診査よ據りて得る所の病徴あり。此の他覺
 徴は素より素人の詳悉する能はざるものあり。故に
 本病の徴候を論ずるに當り、其の自覺徴のみを論述
 して局を結ぶのみ

脚氣は古來乾性濕性の區別ありて、其の水腫を發す

る症を濕性脚氣といひ之を發せざる症を乾性脚氣
 と云ふ。又經過の長短よ從ひ脚氣を急性、次急性及び
 慢性の三種に區別す。急性脚氣は罕よして多くは次
 急性、慢性の二種あり

病毒の体中よ侵襲して病徴を呈するに至るの間之
 を潜伏期と稱す。其の間長短同しからず。本病流行の
 地よ至り病毒を感受して、或は忽ち發病するものあ
 り。或は數月間潛匿して現はれざるものあり。潜伏期
 の間ハ毫も病徴を呈せずして平常よ異なることな
 し

發症ハ先づ通常下肢ハ疲倦墜重を覺へ恰も遠足より疲勞したるが如シ。此の際僅かに歩行するも下肢衰弱し平時ハ比するハ疲倦するおと速かなり。之ハ次きて皮膚の知覺變常を發し多クハ脚の内側ハ沿ふて上方ハ向つて酸麻す。同時ハ知覺も亦た鈍麻シ。其の部ハ觸るハ恰も一葉の紙を隔て、其上を摩するが如き感觸あり。甚しきハ至るときハ電氣を通ずるも特別疼痛を惹へず。又稀れハ知覺過敏となり粗糙なる襪衣を着するときハ其の麻擦より不快の感覺を生ぜるが如きことあり。其の他

足及ヒ膝の關節ハ弛緩して攪々を覺え動もすれば物ハ躓き易く。草履を用ゆれば脱出し木履を穿つときハ踏みかへし大ハ歩行ハ困難なり。夫より足附り足脚ハ浮腫を發す。始めハ常ハ顯れぬがして夜間ハ多クハ消褪し朝より起立若クハ倚坐すること長き時ハ午後より之を發するのみなれども。漸々増劇し來る濕性脚氣ハ於てハ甚しく爲めハ皮膚緊張して指ハて壓するときハ痕跡を生ずるハ至る。又歩行すれば腓腸緊張し之がためハ時として運動ハ際し下肢の疼痛を覺ゆることあり。又按握すれば腓腸部

疼痛を嚮ふ。麻痺ハ漸次ニ蔓延して股若クハ下腹ニ達シ或ハ指端若クハ口圍ニ發ス。又心悸亢進を來シ多くハ初期トモ之を訴ヘ或ハ發病后數日ニして之を訴ふるコトある。其の始めハ輕微ニして只勞動時のみ發スれども次第ニ増劇シ。安靜時ニモ亦尤甚シキニ至ル。往々著キ原由カクして偶然大ニ増盛シ劇甚の苦惱を將來スルコトある。胃部ニハ苦悶を覺え大便多くハ秘結ス。尿利ハ其量大ニ減少シ殊ニ病増進スルニ從ヒ益々減シ。快方ニ傾クニ隨ヒ次第ニ増加スルを以テ。尿量の多少ハ病の吉凶を卜知スルニ

ハ緊要なりトす。以上の諸症増劇するときハ衝心症を發スれども否ラセシテ患者の攝生を守れば。漸次秋冷の候ニ至リテ恢復スルものあり。又慢性ニして冬季ニ至ルモ治癒スルコトカク快復期甚タ長クシテ身体衰弱シ。翌年ニ亘ルものあり。或ハ十全の快復を得セシテ數年間障礙を貽シ原の如ク職業を成シ能セざる者あり

○第十一章 脚氣の衝心症

衝心症ハ預め警報あく卒然現モるゝトあり。或ハ輕易の麻痺。水腫。心悸亢進等の發症ありテ頓カク衝心

症を發する事ありと雖も多くは上記の經過中に來るものにして。水腫及び下肢の癱瘓は劇甚とありて患者尊を離るゝこと能わざ。心悸亢進。心窩痞塞益々甚しく。胸内苦悶を覺え。呼吸不利と。屢に嘔吐を發す。尿利は著しく。畜少とあり甚きは一晝夜に僅かに一二合許を漏すに至る。容貌は極めて痛苦の狀態を顯せし轉輒煩燥と。蒼白の顔色は變じて蒼青とあり數秒時にして遂に死に至る。之を衝心症又冲心症と稱す。精神に變常なきを以て衝心症を發するときハ苦悶殊に甚し。又此の症を發するに先たち頗に頸

圍に水腫を發することあり。此れ惡徵にして預め衝心症の發し來るを察すべし

○第十二章 脚氣の預後

俗に膝脚氣と稱し最も輕易の症にして自然に治癒するものあり。概して論ずるときは麻痺。水腫の輕微なるもの。心悸亢進せざるもの。及び一旦劇甚症に罹りたるものハ預後良なり。又劇しき麻痺ありと雖ども心悸亢進。胸内苦悶等を缺如と若くハ其の輕微なるものハ生命に危險なるものとなし。脚氣病ハ概して預後の良なるものにして。其の死亡の數ハ平均百分

の五乃至六即ち百人の病者に於て五人乃至六人の死亡者を見るの比例なり。然れども實驗に據るに水腫或ハ麻痺の僅少なるもの突然心悸亢進呼吸不利胸内苦悶嘔吐等の衝心症を發して斃るゝものあり。肥滿家の濕性脚氣に罹るときハ预后大に疑ハシ。故一病者こいつをみるだも確實ハ预后を卜知するおと能たを。一症だも早晚恐るべき衝心症を發して慘酷なる轉歸くわんかふハ陷るや否やを預知するおと能たを。若し既に早く心臟症を發して劇度ハ達し且つ増進の速かなるものハ多くハ不良なり。衝心症を發するときハ大概救

ふ能ハ必死の症と云ふべし

○第十三章 脚氣の豫防法

脚氣ハ上論の如く近年各地ハ蔓延して益々猖獗かえいさつを逞ふ。又人をして頃刻の間ハ斃れしむ。其の勢かえいさつハの標悍猛烈なる實に畏るべく。又一回本病ハ罹るときハ多くハ年々發生し。且つ其の經過甚だ慢性あるを以て。殊ハ書生の如きハ定期の學業を果す能ハざるして遂に方向を失ふもの多し。豈に忽かせよすべきの病症からんや。此ハ預防法の今日ハ緊要なる所以なり。凡そ脚氣病原因の小黴菌に在るべきハ已ハ數

年前より學者の間に行はれたる説にして前と言へる如く緒方講師は病菌探求の業に従事し遂に本病の特異病菌を證明してとり其の説闡よ確實と爲れり。本病の原因已に此の小菌に在るを知るべきは其の病菌の發生を妨害し兼て人体に侵襲するを防遏するを以て本病預防法の主策となす。然れども今日尙ほ如何なる方法を以て其の發生を妨げ其の侵襲を妨ぎ得べきや未だ研究の達せざる所あり。蓋し病菌は甚だ么微の物体にして顯微鏡と雖とも最も強度のものに非らざれば之を認むる能わざる如きも

のちれば恐らくは人民交通のあらん限りは決して其の傳播侵入を防止し盡すおと難からん。然れども直接及び間接に本病の流行を誘引すべき原因を求めて其の改良を謀るときは正に病毒の發生を大に妨害するおとを得べし。此の病菌は前に言へる如く好んで不潔卑濕の土地に繁殖するおと明かなれば各地其の土壤を清潔にし飲水を改良し各人其身体を健剛にして此の渺少なる勁敵の繁殖を謝絶するおとを務むべし。又汚水排除法の不適當あるとき汚穢の物質は屢に渠中に阻塞し従て物質をして腐

敗せしめ。之より發生する所の惡臭瓦斯ハ空氣を毒し。其の死水ハ地中に滲透して地質中の有機物と抱和し井水に混するに至るべし。除水渠の改良ハ獨り脚氣病に關するのみならず。大に惡疫(窒扶斯格列刺の如き)の蔓延を防禦し同處傳染病を滅却し人生の健康を保全するの効大あり。羣居密集も之と全く大に本病の流行ハ關係を有するものとして。書生。兵卒。水夫。坐商の如き不健康の房室に斷へば籠居するもの。特に多きを以て。塾舎。軍營及ひ囚獄等^{こゝろ}は於てハ其密居^{たいんせう}醫集^{いしゅう}を戒むべし。或人ハ變形^{へんけい}酸^{さん}素^そ即ち阿巽^{あせん}

の多少も本病の流行ハ關係を來すと云ふ。蓋し阿巽ハ大氣中^{たいき}にありて能く傳染病^{でんじょうびょう}毒^{どく}を撲殺^{ぼくせつ}するの性あるものなればあり。然れ共輓近阿巽ハ衛生上の關係鮮少ありと云ふ

彼の本邦^{ほんぽう}に來住する歐米人の脚氣^{けうき}は罹るおと極めて罕れなるや。其の本邦人と異なる所ハ只飲食。衣服。攝生^{しやくせい}に關するの他は歸すべきの原由を見出する能はざ。抑も食量の充備ならざる其の性の滋養ならざるときハ竟^{ついに}は疾病の抵抗力^{かたいりき}を減損^{げんそん}するを以て。之を考ふるよ。ペリベリの印度^{いन्द}は於ける。脚氣の本邦^{ほんぽう}に於

ける。皆肉食の少くして壯人の滋養に欠亡せる或は介達に誘因となるならんか。故に多量の牛乳、鶏卵、其他適宜の滋養物を食し、抵抗力を強盛ならしむるとき、大いなる本病の豫防となるならん。又平素充分に身体の運動を營み、強壯活潑ならしめ、以て抵抗力を強盛せしむべし。轉地法の充全の預防法ありと雖とも多くは行ひ難きものなり。

○第十四章 脚氣病者の攝生法

既に本病に罹りたるとき、素より速かに醫治を求めべしと雖ども、從來風土變換の肝要なるを視察し

て轉地療法を以て脚氣治法の基本とせり。故に陸軍よては脚氣療養所を健康の山地に設け、即ち東京よては箱根、大坂よては有馬、毎年患者を送致するを法とせり。此の轉地法は多くは初期に於て行へば重症に至らざして速かに治し、又稍や重症のものも概ね死を免かるべしと雖とも、此の轉地法の良續ハ各患者、各時期に從つて斟酌せざるべからず。既に下肢に水腫及び麻痺ありて歩行し難く、漸く看護者の幫助に頼りて兩便を辨し、胸内苦悶せるも最も初期に於て二十里乃至三十里の遠地に轉せしめ、大に爽快

を覺え凡そ二三週よして治せるものあり。又劇甚の水腫若くハ危險の症を發せるものハ決して轉地せしむべからせ。強て之を遠きに輸せば其の効を見ざるのみならず却て死期を促さるものあり。轉地療法の偉効を奏するハ殊ニ輕症の者に在りとせ。此の轉地ハ土地高燥よして大氣清淨。山水佳麗の處を要し。決して温泉の所在に限るものよあらせ。

本病患者ハ寒冒。濕潤を防ぎ。勞動を慎み。神思を役せるおとを止め。飲酒ハ勿論放肆。房事を深く謹慎し。食物ハ消化し易き滋養物例之牛乳。鶏卵。牛肉等を攝取

し。皮膚の機能を旺盛ならしむべし。牛乳ハ滋養ニ必需なる主要成分に富み。消化極めて易く絶えて刺戟の性なし。故に本病の已に消化不良の諸症を兼發せしものに於てハ良好の食餌にして能く榮養を保持し。兼て尿の分泌を増進し水腫を消褪せしめ。亦從ひて呼吸の頻數なるものハ漸く減少し脈搏の疾數なるも漸く緩徐となる。故に呼吸困難の症亦た漸く解け心跳亦た漸く鎮靜するの効あり。又牛乳療法を持重し來るものに於てハ概して甚しき衰弱を遺さざ。知覺の麻痺運動の不遂も隨ひて輕快し其の經過久

ときに彌らさるが如しといふ。又米飯より寧ろ麥飯を佳とせばと云ふものあれども、強て習慣を變じべからず。含む所の蛋白質の多少は、麥を以て米より多しとせ。然れども麥飯は其容大にして且つ水分を含むと多く、全く消化し能せずして排泄せらる。蛋白質の最も多きものは大豆にして牛肉之に次ぎ。米の如きは極めて少量なり。赤小豆は蛋白質を含蓄するを米より多量あり然れ共利尿の効ありと云ふは其の説疑し。大豆の消化の點に至りては遙かに牛肉。魚肉の下に位し米にだも及ばざるあり。

快復の後ハ滋養強壯の食餌を取り適宜の運動を營み急に過劇の勞役に就くを慎むべし。殊に兵士の如きハ治後直ちに隊伍に復して他の強健なる兵士と共に奔馳勞動をなすべからず。以上論述する所單に脚氣病の一斑に過ぎず。覽者尙ほ其の詳細を採知せんと欲せば宜しく成書に就て見るべし。

明治十八年七月十四日版權免許
同十八年八月出版

定價金廿錢

校閱者

東京大學教授兼
醫學部脚氣病院監督

原田 豐
神田區駿河臺南甲賀町

纂輯人

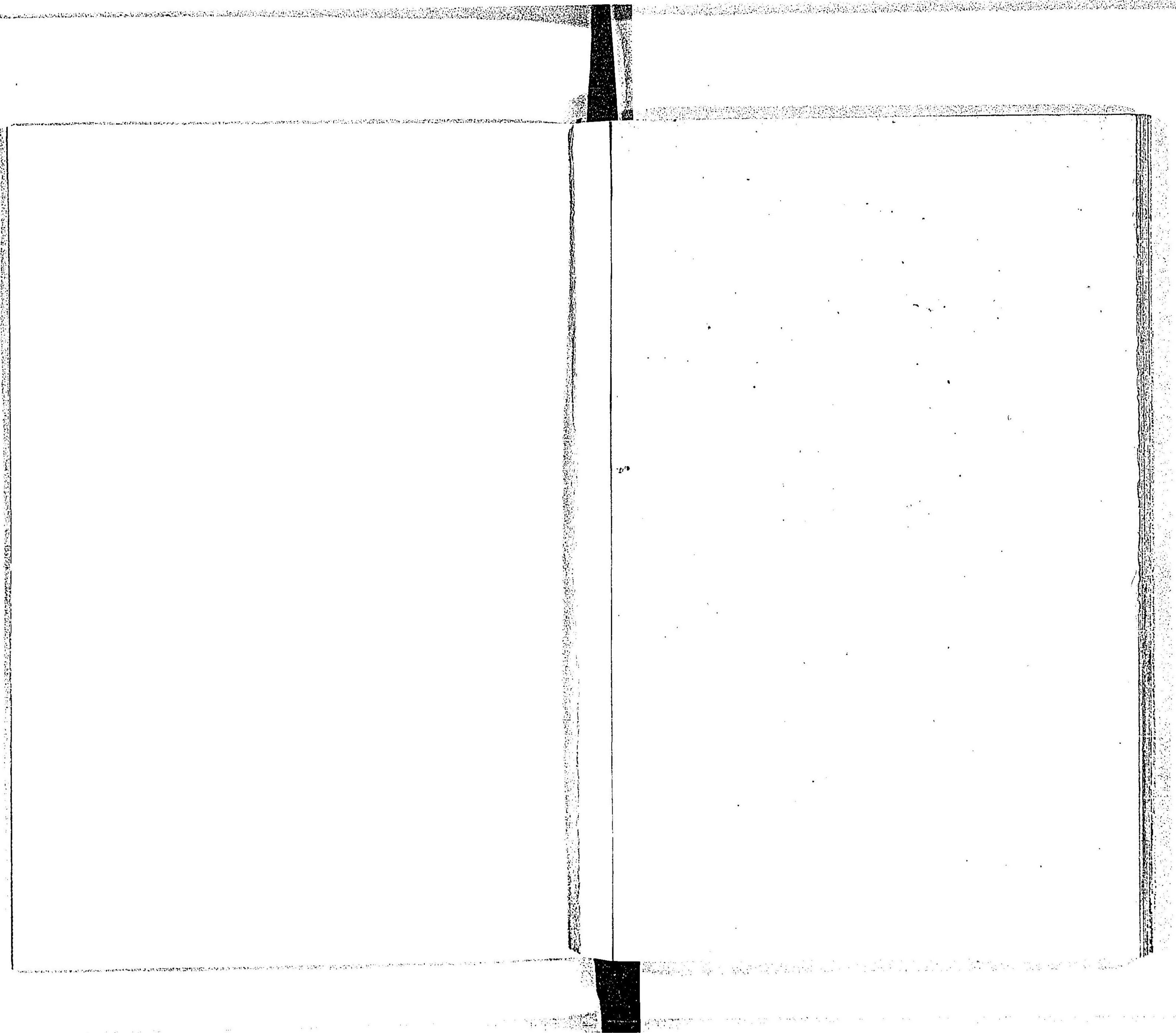
金親 雄
下谷區練塀町廿六番地

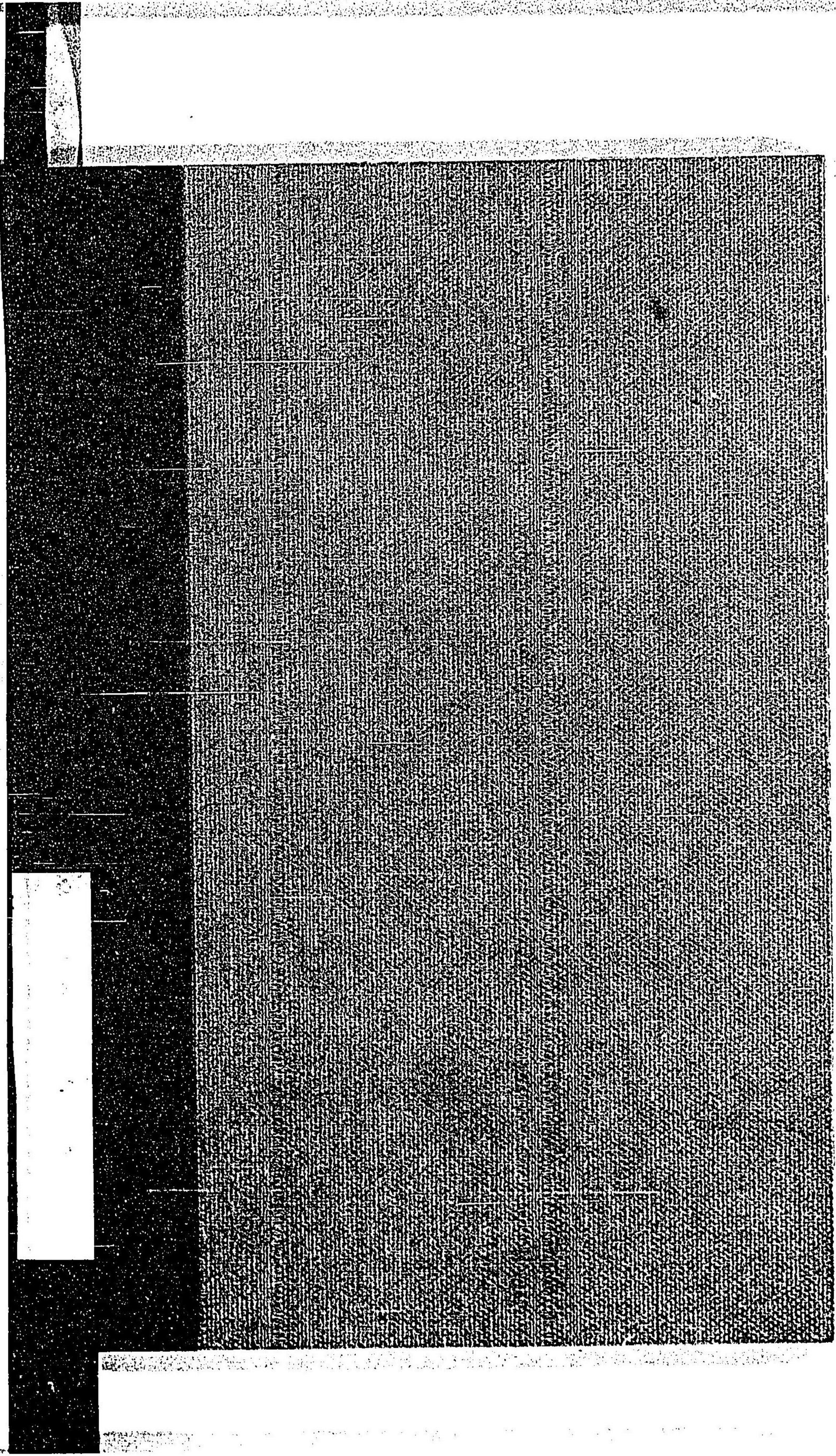
出版人

伊藤 岩次郎
神田區西福田町一番地

印刷所

稻田活版所
京橋區元數寄屋町四丁目





特25

744

庶人
須知 脚気一斑

国立国会図書館

058951-000-7

特25-744

脚気一斑(庶人須知) 一名, 脚気心得

金親雄 / 編

M18

CBD-0033

